

---

# 落ち葉舞う

朧月

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

落ち葉舞う

### 【Nコード】

N8483C

### 【作者名】

朧月

### 【あらすじ】

イチヨウで彩られた初恋。会えたけれども、お互い名乗らず別れた二人。けれども、それはひよんな事から再会を果たす事になる。

（原作で出た博士の初恋のお話の後日エピソード的なものです。博士とフサエさん大好き〜で作ってしまいましたが、原作の再会を楽しみにして居られる方は、イメージぶち壊したらすみません><宜しければ是非私の考えた一つの異ストーリーとしてみていただければ幸いです^ー^;)）

First part . . .

まってるからね……

10年後も、20年後も……

ずっと、ずっとまってるからね。

あなたが思い出してくれるまで。

あなたとまたかわらぬ再会をはたすその時まで……

落ち葉舞う

落ち葉舞う

そう、ずっと待ってた。その日が来るたびめかしこんで、朝から晩まで。落ちるその葉を見つめながら、10代の頃、20代の頃、30代の頃……そしてあの時も。

来てくれるかも知れない。でももしかしてもう忘れてしまっているかもしれない。あんな昔に交わした約束など、彼にとっては些細な事だっただろうから。

雨の日も、強い風の吹いていた日も、いつもいつも待ち続けている。大切な思い出の黄色い落ち葉を眺めながら。

「今でもイチヨウは大好きですよー!!!」

叶う日なんて来るかどうか半信半疑だった再会が見事果たせた日。車の中で聞こえた彼の声に、40年分の想いがあふれた。もう暖かな家庭に囲まれて、5人も幼い子供を連れていた彼はこんなに経つてからもずっと覚えていてくれたのだ。

自分が、彼に思いを寄せるきっかけとなった、あの言葉。

コンプレックスだった髪の色を好きだと言ってくれた、あの彼との思い出の場所。今も未だ生き続けている記憶があると、そう教えてくれた。

「フサエブランドの限定バッグ、もう残り20品ですー！ その後にお並びのお客様には、フサエキャンベルのサイン入りウォレットのみのご提供となりますー!!」

店員のマイクの声が店中に響き渡る。それを聞きながら、用意された大量のウォレットにサインをつづっていく。

イベントをしたいともちかけられたのは、つい1週間前。この秋二度目の限定販売だ。凄く鼻負に思ってもらっている店だから、断りきれずにOKした。何でも、200品限定のブランドバッグのオリ

ジナルデザインを考えて、店頭でサインするブランドウォレットと一緒に販売するのだ、という。

お昼休憩を挟んで、午後は1時〜2時まで。もう並ぶお客さんに規制を引いて、何とか間に合いそうだ。

最初、200なんて簡単に売れるワケないと思ったけど、限定パウーというのは凄いらしく、朝開店時から始まったこのイベントも、お昼前の今には、もう残り僅かの状態になっていた。

「あつ、いつもバックとかお財布とか、出るもの全部買ってます！ 大ファンなんです、私！」

「ありがとうございます。これからもよろしくお願いしますね」

来る客の大体が10代後半〜20代位の若い女性。そこに、たまに30代40代の人が並んでいる。今嬉しそうに大ファンとはしゃいで行った客も、また20代前半程度つて所。

「こんにちは！」

「あら、あなた達……」

2つ残った最後のバックの客は、とても覚えのある顔だった。女子高生2人と、付き添いで来たと思う男の子が1人。

「あの、園子……この子に教えてもらったんです。フサエブランドの限定バック販売があるから来ないかって。前買ったバッグが凄く気に入って……」

「ココ、鈴木財閥で経営してるお店だからね、パパにイベントの事聞いて絶対手に入れるって狙ってたのよ！」

「嬉しいわ、いつもありがとう」

微笑を浮かべながら対応する。気に入ってくれたという声は、何

より嬉しいものだ。

「ね、ねえっ。おばさんボクの事覚えてる？」

「え？」

話しかけられるとは思わなかったから、一瞬驚いた。その少年は大体小学校低学年位で、眼鏡をかけて……そういわれてみれば、どこかで会った気もする。

「コナン君、フサエキャンベルと知り合いなの？」

「らーん、どーせこのガキンチョの勘違いだつて。知ってるわけないでしょ？」

上からかかる意外そうな声にも、彼は耳を傾けずに確信しているようだ。どこかで会った。確かに自分自身、そう思う。どこか、大切な場所。

「坊や、どこで私と会ったの？」

尋ねると、少年は歳不相応に大人びた静かな笑みを浮かべた。

「……」 小学校のイチヨウの木の下” っつて言えば、思い出す？」

「あ！ 坊やあの時の？ そうだわ、あのお孫さんの一人！」

確かに、あの時5人居た子供達の中の1人に、この少年の姿を見た。けど、少年は少し苦笑いを浮かべている。

「う、うん……。その事で、ちょっと誤解があると思うから、できれば時間取って欲しいな。おばさん忙しい？」

「そうね、今日ここが2時に終わるんだけど、その後少しだけなら

時間取れると思うわ。坊やの都合はどう？」

「じゃあ、2時半に例の場所で待っていていい？ その時に、他の4人も一緒に居るかも知れないけど」

「判ったわ。約束ね」

指きりを交わす姿を、不思議そうに見つめる目がいくつもあった。そういえば、こんな風に昔指きりをした少女が居たのも鮮明に覚えている。イチヨウの下で過ごす日の事だけは。

彼らが帰ってから、また来る客沢山の相手をして、ついにその約束の2時半になった。どんな誤解があったというのだろうかと考えると、少しドキドキする。

そして、約束した例の場所に向かった。

「フサエさん、こっちだよ！」

キョロキョロしていると、呼ぶ声が届いた。先程の少年と、あと4人、そういえばこのメンバー全員で来るとあの時の子供達と一発で判る。

「少し遅くなった？ ごめんなさい」

「ううん、全然待ってないから大丈夫！ 忙しい中で時間作ってくれて有難う！」

駆け寄ってくるその姿が可愛らしく思う。近くで見れば、随分と個性的な子達だ。

1人は眼鏡の大人びた少年、1人は自分の幼い頃を思わせる明るい茶髪のクールな少女。

そして、他の3人は2人から見ると随分子供のイメージが強い。  
10円ハゲのトド体系君と、そばかすのつば君と、カチューシャの  
可愛い女の子。

「おじいちゃんは、元気？」

尋ねると、皆が顔を見合わせて苦笑した。その意味は少し判りか  
ねて、首を傾げた。

最初に言葉を発したのは、眼鏡の彼。

「あのね、おばさん。阿笠博士は、ボク達のおじいちゃんじゃない  
んだ」

アレ？ と、固まった。ぽかんとした顔を浮かべるのにもお構い  
なしに、子供達は口々に話す。

「歩美達と一緒にだったから、そんな風に思っちゃったのかなーって、  
あれから反省したんだよ！」

「もちろん、お父さんでもないわ。私は博士の家に預けてもらって  
るけど、一応血はつながらない赤の他人だから安心して」

「そうそう！ コナンの親戚の博士ですよー、コナン経由で知り合っ  
たんだよ。色んな所連れてってくれるし、色んなもん食わしてくれ  
るし。オレらにとっては、じーちゃんみたいなもんだけどなー！」

「そうです！ それに博士はまだ独身ですよ。寂しい独り身なん  
です！」

たまに、少し失礼な言葉も混じっている気はするけど、基本的に  
皆彼の事が好きだとよく判る。皆に慕われている、博士。

「……彼女も居ないわ。それに博士、あれでもずっとアナタとの約

束覚えていたのよ。ただ、ちょっと辿り着けなかったただけでね。」  
「あの手紙の事を？」

忘れられているかと思っていた。40年も経ってから、偶然思い出して孫でも連れて来て見る気になった、と。

「博士、10年ごとに毎年、ちゃんと色々な場所に行ってたみたいだよ。フサエさんとの思い出の場所だって思ってた所」  
「本当に？」

眼鏡の少年の言葉に、いい年して胸が高鳴った。

ちゃんと覚えてくれていたとしたら……40年待ちぼうけをくり続けたあのイチョウの下で待つ自分同様、彼もまたそれぞれ別の場所で待ち続けていてくれていたとしたら。

「オレ達、そんな博士の初恋叶えてやりたくてよー、探すのに協力してやったんだ！」

「フサエさんと再会した後の博士、凄く幸せそうでしたよ！」

「うん、だからね、歩美達あんな風に博士を喜ばせてあげたいの！」

子供達の言葉に、嬉しくて涙が出そうだった。ぐっと堪えて、微笑んでみせる。

「ありがとう……皆」

空から舞う黄色いイチョウの葉が、凄くしんみりした気分になした。下から見つめる暖かな視線が、とても幸せに思う。

## 落ち葉舞う

「フサエさん、だからね、博士と会う気になってくれた？」

「え？」

「あんなんでもオレ達の大事な博士だからよー、あんまりこっぴどいふり方はすんなよな？」  
「ふつたりなんて……」

子供達の言葉が、妙に引っかかる。まるで、これから話の中心に居る彼と……

「あつ、来た！ こっちこっち！」  
「そんな驚いた顔しないで下さい！ 僕達ちゃんと話つけましたから」

私の後ろの方を見て、カチューシャの彼女が嬉しそうに手を振った。一瞬戸惑う気配を感じた後ろから、さく、さくっとイチヨウの葉を踏む音が段々近づいてくる。まさか、と思い、どくどくうるさい心音を無視してゆっくりと振り向いた。

「……阿笠君？」  
「ふ、フサエさん！」

そこにあつた姿に、つい昔と変わらぬ呼び名が口から零れた。そして、彼も今度のはつきりと名前を呼ぶ。

この間、イチヨウの下で再会した時は、知らない人を装っていた。だから、ある意味これが40年ぶりの再会だ。そう考えると、体中が熱くなる。

小さな子供達に見守られながら、何か声をかけなくてはと必死で自分に言い聞かせた。

「……イチヨウ、今日もまた綺麗ですわね」  
「お、おお、そうじゃな。40年でこの町も色々変わってしまったが、このイチヨウ並木だけは、ずっと変わらず綺麗ですよ」

彼も緊張しているのか、少し堅い口調で応えて笑った。

「今日は、子供達にここにつれてきてもらったの。ここは、私の大切な思い出の場所なのですよ」

「ワシも同じじゃよ、この子らがどうしてもここに来て欲しいと言いついてのお。何事かと思って来て見れば、イチヨウの葉っぱのよう綺麗な髪の方が立っておったのじゃよ」

イチヨウの葉っぱみたいで綺麗じゃないか。と優しく笑った少年の言葉が、あの時怯えていた幼い少女を救った。今も、その時の優しい笑顔のまま変わらない彼が居る。

待っていた甲斐があった。そう感じて、凄く穏やかな気持ちになれた。

「昔、私がまだ小学生の頃、同じことを言ってくれた人がいましたの。知ってらっしゃる？」

「ああ、ちゃんと覚えておるよ」

「ずっと、コンプレックスでしたのよ。この髪のせいで何度も苛められて、どうしても黒くないんだろって。でも、イチヨウみたいで好きだって言ってくれた人が居たから……逆に私、この髪の色が大好きになれましたのよ」

フサエブランドのイチヨウは、40年続く初恋の気持ちを含めたもの。ずっと支えてくれたその少年の言葉が、いつでも力になってくれた。

「そして、私はその人の事も大好きになりましたの。……すぐ、転校が決まって、たくさん泣いたけど、でもいつか会えるってそう信じて、最後にたった一通のはがきを置いていきました」

お別れじゃなく、再会の為に。まだおさなかつた自分が、精一杯頭を振り絞って考えた、この場所に続く彼だけがきつと分かる暗号を添えて。

1年目も、2年目、3年目も。舞い散るイチョウを見つめて、朝早くから夜遅くまで。きつと会える事を信じて、あの日の思い出を胸の中にずっと反復させながら。

「す、スマンのお、ずっと待たせてしまってたんじゃな」

申し訳なさそうに謝る彼に、静かに微笑んだ。

「……彼は同じ時間、いつも別の場所に居たと聞きましたわ。別の場所で、私を待っていてくれたと。40年かかって、やっとここに辿り着いて下さったのね」

「少し、遅すぎたかの？ ワシの頭がハゲる前に到着したかったものじゃが……」

ハハハ、と気まずそうにさする彼の、白髪に、ぼっかりハゲた頭。まだそんな歳でもない筈なのに、まるでおじいさんの外見だ。人がよさそうなお老人と言った感じ。

時間は、残酷に彼の外見を老いさせた。そして自分自身も、もう50手前のおばさんだ。

「でも、待ってるって約束しましたから。おばあちゃんになってもって。だから……」

話すごとに、40年分の思いが感極まって溢れてくる。だんだん、

目頭が熱くなつて、視界に居る彼もイチョウも、ぼやけてくるように感じた。

「だから、初めてあなたの姿を見つけた時、凄く嬉しかったわ。やっと会えた、つて。信じてたけど、でも半信半疑だったから。私にはとても奇跡的な事だったの」

「ふ、フサエさん……あ、えっと、これハンカチじゃ」

かなり狼狽し、慌ててポケットから取り出されたハンカチからは、優しい温もりがした。

後ろの子供達が、小声で彼に「抱きしめろ」と何度も囁いているのがお互い聞こえて、つい赤面してしまう。

「そ、その……フサエさんがもしよければじゃが。これから喫茶店かワシの家でも、落ち着いて何か飲みながら話さんかのお？」

「あ……ごめんなさい。これから今日はまだ仕事があつて、あと少ししか居られないの」

「そ、そうじゃつたか……」

がくつと頂垂れた彼を眺めながら、もう一度だけある勇気を振り絞った。

「明日、なら！ 明日なら1日空いてるわ。……もし、阿笠君がよかつたらだけど」

今更こんな色恋問題にドキドキ胸を躍らせる事になるとは思わなかつた。けれど、10年後20年後、またお互い元気で会える保障もない。だからこれを逃したらいけないと思つた。

40年もかけて、ようやくめぐり合えた2人なのだから。

「あ、明日は……ワシもずっと空いておるよ」

「じゃあ、朝の10時……ここで、待ち合わせして下さる？」

「勿論じゃ。楽しみにしておるよ」

こんな日が来ると思わなかった。まさか彼と普通に待ち合わせする事が出来る日が来る、なんて。随分遅くなってしまったけれど、やっとまたいつでも会えるようになったのだ。

その日は、そのまま別れた。彼や子供達の背後に舞うイチョウに感慨深さを思いながら。

彼と別れてから最初の10年目は、悪い事と思いながらも大学の講義を休んでそこに向かった。その頃は、まだ若い気持ちのまま、彼に絶対会えるつもりでそこに辿り着いた。

10年ぶりに会う彼へのプレゼントまで用意して、彼に見せようと思って自分が目指してるデザイナーの、初めて書いた設計画までもって行った。

いつ来るのだろういつ来るのだろう、と胸をときめかせて、彼と一緒に食事をするつもりで、家での夕食も断ってまで。

けど、迎えてしまった日没に、涙が零れた。もしかして忘れられたんじゃないかと、疑ったりもした。

2回目のその日は、今度こそ！ という気持ちでそこに向かった。けれどまた結局彼に会える事はなかった。

3回目は、雨が降ってる日だった。イチョウも土と一緒にぐっし

より濡れて、何だかむなしかった。もう彼は来ないかも知れない、と諦めていた頃。案の定、彼はずっと現れなかった。

日暮れ前に、そろそろ今年も終わりか、と思った時、1人の女の子が同じようにそこに寄りかかっている、その子との指きりで、また頑張ろうと決めた。

30年も待つて現れなかった彼を、少しだけ恨んだ。けれど、やっぱりイチョウを見るたび暖かいものがたくさんこみ上げて来るから。

イチョウのデザインが有名になれば、もしかしたら彼が見つけて思い出してくれるかも知れない、なんて淡い期待。

もう、絶対に会えないと思っていた。それでも死ぬまではずっと待ち続けるつもりで。

明日のデートは、イチョウのデザインで行こう。40年分のこの気持ち、彼にしっかり思い知ってもらおう。

イチョウの葉っぱに包まれた、切なくて優しく暖かい、思い出の日々を。

落ち葉舞う

First part . . . (後書き)

作者より

えーと、お読みいただきまして有難う御座います〜っv前後編仕立てとなっておりませう^^

というか、私本当に好きでね、二人。フサエさん再登場希望なのですよ。だから、二人の再会は出来れば原作で見たいのですが、原作がアソコで終わったままだから、書くとなるとどうしても再会させないと始まらなくて(^^)^^; 前から作ってたものですが、今丁度秋の季節という事で、本格的に進めて投稿してみましたv

もしこれでも宜しければ、また是非後編もご覧になっていたかと幸せですv

それでは、今回は有難う御座います〜っv v v

L a t t e r   p a r t . . .

イチヨウの舞い散る中で、時間より早めにきて彼を待っていた。思い出す40年は、いつもちよっぴり苦い思い出もあったけれど、今はその時とは全く違う意味を持つ。

「フサエさん！ 待ったかのお？」

「いいえ、今来たところですよ。どうでしょうか、これから…昨日の喫茶にでも？」

「そうじゃな、けど、ランチより前に、ここで少し思い出に浸るのもいいんじゃないかのお」

少し走ってきたようで、額にかいた汗を拭いながら、彼はそう話した。

徐にその場に腰掛ける彼を見て、同じように隣に座る。ひらひらと舞うイチヨウを眺めながら2人でゆったり過ごす時間。1人で待っていた時は憧れたものだ。

「……阿笠君が、何も変わってなくて安心したわ」

「そう言ってくれると嬉しいよ。ハゲ頭に幻滅されるのも怖かったしな」

「ふふつ、それは本当にいいのよ。博士になっただんでしょ？ 知的な感じで逆に素敵に見えるもの」

頑張って待ってた結果。それが、この2人きりの幸せで穏やかな空間なら、とても満足だ。

例え彼が、昔より太ったとしても、白髪だらけだとしても、ハゲていたとしても。変わらず纏っている、優しい空気が愛しい。

「だって、髪の色なんて関係ないって、そう教えてくれたのも阿笠君。そうね、晴れた空に優しく浮かぶ、雲みたいで大好きよ」

「嬉しいのお、まさかそう言ってくれるとは思わなかったよ」

「そんな事で幻滅するなら、最初から40年も待ってないわ。思えば私の人生は、みんな阿笠君を中心に回ってたの。ホラ」

出したバッグは、フサエブランドの売れる起点となった、イチヨウ柄。もう古いデザイン過ぎて、どこの店にも売ってはいない。けれど最も思い出深い。

「阿笠君に見つけて欲しくて、このバッグを作ったの。独立してすぐに、ね」

ずっと待っている気持ちを込めてデザインしたバッグ。そういう気持ちを手にしてくれた人にも繋がったのか、そこから沢山売れ出すようになった。

「暖かい柄じゃな。ワシも大好きじゃよ、フサエさんの愛が籠ったこのイチヨウは」

「ありがとう。こうして会えた今になっては、今度は幸せをイメージしたデザインが出来そうだわ」

じゅうたんのように敷き詰められたイチヨウの葉に座り、まだ舞い降りてくる暖かい色を眺めながら、暫く2人はそこで思いを語り合った。

小さい頃の事や、別れた後の事。伝えたい事は沢山あった。それを、全て語るには時間が何時間あっても足りないものだ。

ランチをしている時も、映画館を見に行つて、喫茶店に行つて、夜は2人でディナーまで食べて。フルコースなデートは1日中幸せ

な時間だった。

最後の帰る頃は、ひたすら別れが惜しく、また次に会う約束も交わした。

次の時には、また次の約束。そして、また更に次の時にも、別れの前に会う約束を交わした。

「じゃあ、阿笠君。また明日……楽しみに、待ってますね」

「ワシも、今からドキドキしておるよ！」

玄関先で、2人で赤面しながら向かい合う。帰るのが名残惜しく思うが、この際もう明日の事でお互い頭が一杯だった。

同じく、彼の後ろでクールに見送る小さな少女にも、微笑み、手を振る。今夜は、眠れるかどうか判らない。

落ち葉舞う〜L a t t e r p a r t〜

落ち葉舞う

「まさか、こんなに話が進んでたとはオレも思わなかったよ」

「クスッ、私もさすがに少し驚いたわ。名探偵さんは、どうなのか

しら？ 彼女と」

「あ・の・なあ……そういう事言う前に、この体何とかしてくれねーか？」

「それもそうね」

さほど大きくない、こじんまりとした雰囲気の会場だった。コナンはタキシード、哀はドレス姿でそこに居た。

「でも、やっぱり凄く綺麗な人よね、フサエさんって」

「でしょ？ 蘭姉ちゃんも、同じ位綺麗な格好いつか見せて欲しいな！」

「もーっ、コナン君!？」

真っ赤になつた蘭の顔に、コナンもしたり顔で笑う。

「あら、博士も中々男前よ？ 衣装が張り裂けるんじゃないかって心配したけど」

哀の言葉に、蘭は苦い笑いを浮かべた。

「あ、哀ちゃん……それはちよっと」

「オメーなあ。一応アレでも年長者だぞ？」

だが、呆れ顔のコナンもまた、博士の姿を想像すると笑いを堪えきれない。

「ブハ……ッ！ ハ、ハハハハハッ」

「ホラ、見なさい。アナタだって……」

「う、うっせ……！ オメーが変な事言うからだろ？」

「もーっ、コナン君も哀ちゃんも。博士に失礼よ？ ホントに、年

長者なんだから」

ハア、と溜め息をついた蘭の前で、コナンは哀の白けた視線を浴びながらもう少しだけ笑い続けた。

「コナン君くん！」

「オメー、博士に会いに行かなくていいのかよ？」

「2人とも素敵でしたよ！」

3人が、扉からコナン達の方に駆けてくる3人の正装姿もまた珍しい。この日の為に、恐らく特別に見立ててもらったのだろう。歩美はコナンと哀の服装をじっと眺め、気づいたように哀に寄った。

「おそろいだね、そのブローチ！」

「あら、そうね。博士に見立ててもらったけど、私にはあんまり…  
…可愛いイメージだから、アナタは凄く似合うわ」

「そんな事ないよ、哀ちゃんも可愛い！」

「ありがとう」

突然女の子らしい会話になった2人には入れず、コナンはちらりと扉の向こうを見た。そして、ふらっとそちらへ歩き出した。

## 落ち葉舞う

いかにも、そこは特別な部屋だった。立派なパーティー会場の中の、豪華に飾られた個室だ。辿り着くなり、コナンはそこに立ち止まり、ノックして戸を開けた。

「お。博士、中々決まってるじゃねーか！」  
「おーっ、新一！」

声をかけると、嬉しそうな博士が振り向いた。心なしか、年甲斐もなく赤面している。

「いやー、まさかこんな日が来るとは思わなかったぞ」

「ハハハッ、オレも。でも、やっぱり嬉しいモンだな。オレにとつて、博士はホラ。じーさ……えっと、もう一人の父さんみてーなものだろ？」

「新一、今何か別の事を言いかけなかったか？　じーさん、とか」

ジト目で睨まれて、コナンは慌てて首を振った。一応、こう見えてまだ50代前半。じいさん呼ばわりはさすがに早すぎる。変に年寄り扱いすると、不機嫌になって拗ねてしまうような子供っぽい所が彼にはあるのだ。

「しっかし、よく勇氣出したな。そんな歳と頭で……あ、そういや、灰原はどうすんだ？　アイツ何も言っていなかったけど。博士がそうなるか……」

「……ちよっと待て、新一。頭は関係ないじゃろ！　それに、哀君の事は心配要らんよ、ワシとフサエさんと、哀君で一応話し合ったんじゃ」

阿笠家で家族会議が行われたのは、つい1週間前の事だった。議

題はつまり、今後の事という内容で。

「え……結婚!?!」

「ああ、実はその。そうなんじゃよ。そういう話に」

「だ、誰と?」

「勿論、彼女とじゃ。ワシらももう若くないしの……あれからデートを重ねたんじゃが。あまり遅くなる前に思い切ってしてしまおうと、プロポーズしておったんじゃ」

そんな事など全く寝耳に水の哀は、珍しく驚きのあまり口をぱくぱくとさせていた。博士は恥ずかしそうに頬をかく。

「フサエさんにも、これから来て欲しいと言ってあるんじゃよ」

「……さすがに、驚いたわ。まさかそんな話になってると思わなかったもの」

「ワシも、OKもらえるとは思ってなかったんじゃが……」

チャイムが鳴るなり、博士は玄関へと駆け出した。フサエを上機嫌で家に招きいれ、哀と向かい合っように座る。

「こんにちは、灰原さん」

「え、ええ。こんにちは……まあ、そういうことなら安心して、いつでも出てくから」

答えた哀の言葉に、博士とフサエは顔を見合わせた。

「その事なんじゃが、哀君」

「私達が結婚したからって、あなたがここを出て行くのはおかしいわ。だから、今までどおり同じ屋根の下で暮らせたらって思うの」

「え? で、でも私……」

「むしろ、私の方がお願いしなきゃいけないわ。結婚した後、この家に住んでもいいかどうか」

困惑する哀に、フサエはそう告げて控えめに微笑んだ。

「あなたが複雑な生い立ちだって事は聞いたわ。気まずい思いはして欲しくないって、阿笠君も心配してたのよ。勿論無理して説明しなくてもいいし、もし教えてくれる気になった時でも聞かせてくれればいいの。仕事があるから、朝夜くらいしか帰ってこないし。事情を知らない私が居ると、気を遣う？」

「哀君が決めていいんじゃないよ。フサエさんは嫌なら別居でと言ってくれておるし。……その、最終的に全てが解決した後は、フサエさんにも君の事を教えて親子にでもなれたらワシらは幸せなんじゃが……」

2人の優しい顔を交互に見つめながら、哀は少しか考えた。そして、静かに微笑う。

「そういう事なら、私も嬉しいわ。……ありがと、博士もフサエさんも」

そして、阿笠家に家族が1人増える事も決まり、園子の家の計らいで、その1週間後に式をあげる事になったのだ。哀が全てを終えて、志保に戻るまで、この擬似家族関係は続く事になる。

コナンも元の場所に帰り、いよいよ式が始まるうとしていた。帰

るなり哀を軽く小突いたコナンが、小さく彼女の耳元でよかつたな、と呟く。それと同時に、照明は突然赤じゅうたんを照らした。

「それでは皆様、新郎新婦のご入場です。拍手でお迎え下さい！」

マイクの声と同時に、幸せの音楽がかかる。開いた扉から、少し遅咲きの2人がバージンロードを1歩1歩と歩いた。

40年間ずっとその思いと共に歩き続けて来た、2人の道が重なる瞬間。彼らは思い思いの幸せをすぐ隣に感じながら、新たなスタートを切った。

1年経ち、また黄葉鮮やかな季節が訪れた。

かつての場所。ひらひらと、柔らかく踊るように舞う落ち葉の道を、手を繋ぎながら歩く影がある。もう既に何年も夫婦として付き添ってきたような2人の中には、穏やかで優しい時が流れていた。

「今年もまた、綺麗なイチョウですね」

「ああ、子供の頃に戻ったみたいじゃな」

この黄色に埋め尽くされた世界の中で、もう彼女も独りではない。

寂しかったその40年分の思いを、少年だった頃と変わらずに、全て受け止めて暖かく返してくれる、大きな手があるから。

落ち葉舞う

「来年もまた、歩きましょう。今度は今日来る事の出来なかった大切な家族も連れて」

こんな当たり前の日常が、何より平和で幸せな宝物。

L a t t e r   p a r t . . . (後書き)

作者より

どうも、こんばんはーV後編です(^^)

そして、お読みいただきまして有難う御座いましたーっ。

それからそれから、原作で見ようと楽しみにしていた方は、私なんぞが美味しいところどりしてしまつてすみません！

くつつけたかつたの。くつつけたかつたのよーっ><どうしても。

デート一日する後編の結末も、そりゃ考えた事は考えたけど、でも、それよりゴールさせたかつたの><

というわけで、この作品に限らず昨日は沢山のお言葉を頂きまして、ありがとうございますーっV V

土はもう終わったから、休み中に、レスお返しできればと思つておりますV V

反応はもう、いつでも凄く嬉しいので、こんな私のお話でよければ、もういつでも何度でも、カモンカモンですよV V V

ホント、あまりの嬉しさに、小躍り踊つたくらいですから(笑)  
皆様に、感謝感謝ですV V

と言うわけで、後編となりましたが。また書きたいなあ、フサエさんと博士のお話。

恋人としての二人とか、ここで書けなかった事も興味ありますしV V

「書くよー」とは言えませんが、もしこんな雰囲気も気に入って下さった居るとしたら、また挑戦するかも知れません

でも、一番希望してるのは、原作での二人の進展かなVまたフサエ

さん登場させて欲しいですーっ、青山先生><むーんっとなにして送ったら、受信してくれたりしないかしら(笑)  
さあさ、皆様もご一緒に！ 登場ぶりーず！

あ、フサエさんの口調の切り替えがさりげなく難しかったです(笑)その辺は、ビリーへの話し方を参考に。博士相手なら、慣れればもっと碎けるかなーとかも思ったりして。

もしお楽しみいただけましたら凄く嬉しいです！

また次回作や、その他のお話なども、よければ是非読んでやって下さいませ〜(^^)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8483c/>

---

落ち葉舞う

2009年3月28日23時10分発行